

ヌタデ、アゼムシロ、ワスレナグサ、ネコノメソウ、イボクサ、ドジョウツナギ、ムツオレグサ、ミゾイチゴツナギなども沈水生活をしていることがある。

このように湧水地帯の小河川や用排水路では、沈水生活をする抽水植物や浮葉植物、あるいは陸生植物の生活環は不完全であるために同定が困難である。ことにミクリ、ヒルムシロ、タネツケバナ、ムツオレグサのグループは混乱をおこすことが多い。

湧水地帯の水環境は、このように水生植物に対してプラスとマイナスの二面をもっているが、清水を好むオランダガラシ、ミズタガラシ、ワスレナグサ、バイカモなどにとっては優れた生育環境である。水深が浅い用水路などでは、オランダガラシ、ワスレナグサ、ミズハコベなどの大群落を見ることがある。また、氷期の遺存植物として知られているミツガシワが、昭和の終わりまで海岸から0.3kmの用水縁（黒部市立野の神社裏）に自生していた。平成になって用水路の三方コンクリート化で姿を消してしまったが、それまでは畔草に混じって、畦草と一緒に鎌で刈り取られながら生活していた。低水温の湧水によって今日まで温存していたものと思われる。

水生植物の消長

水生植物の生育環境は、用排水路の三方コンクリート化や生活排水などの流入によって衰退した。ことに用排水路の水環境は、水域が限定されており、閉鎖的で拡散

性が乏しく、このような環境で水質汚濁が進行すると、水生植物は壊滅的な打撃を受けることになる。汚濁が進むと、清水性水生植物は衰退し、代わって汚濁に強い、いわゆる耐汚濁性の水生植物が侵入する。さらに汚濁が進むと、耐汚濁性の水生植物も姿を消し、川は裸床化する。

一般に湧水源付近には、清水性のきわめて高いカワモズク、ウキゴケ、そのほかバイカモや沈水生活をするセリ、ノチドメ、ネコノメソウ、オランダガラシ、ミズタガラシなどが見られる。汚濁が進むと、最初にカワモズクやウキゴケが姿を消し、次にバイカモや沈水生活をするセリ、ノチドメなどが衰退する。中程度に汚濁が進むとヒルムシロ類が後退し、代わって汚濁に強いエビモ、ヤナギモや、沈水生活をするミクリ類などが侵入する。また、水生植物の種数が減少し単純群落になる。汚濁が激しいところでは、水生植物を全く欠いて裸床になる。一方、汚濁の防止策がとられた用水路や、下水道が完備したところでは、沈水生活をするミクリ類、ヒルムシロ類、そのほかエビモなどが回復してきている。

湧水地帯を流れる、小河川の高橋川が、今度、国の「ふるさとの川モデル事業」の指定を受けた。富山県と黒部市では、これに合流する湧水の流れる仁助川を含めて、水辺環境の整備を進めている。この事業が水に対する理解を深め、黒部川扇状地の湧水群の機能回復に発展していくことを期待するものである。

○西野麻知子監修『滋賀の水生動物 図解ハンドブック』（新学社、1996年12月、B5判 56p、500円）

小中学校の生徒たちの副読本として編集されている「滋賀の自然観察シリーズ」が、この5冊目をもって一応の完結をみた。

まず本書だが、ここで扱われる水生動物は、貝類と甲殻類（エビ、カニの仲間）が中心で、そのほかに私たちの目にふれるミミズ、ヒル、ウズムシ、カイメン、コケムシなど他の本ではめったに取り上げられないマイナーな分類群に及ぶ。種の見分け方が、わかりやすい図解と文章で説明され、生態の特徴や人間生活とのかかわり、県内における分布状況なども紹介される。随所にはさまざまなトピックスや特集では、子供たちにはできる観察テーマや環境問題が取り上げられる。

本シリーズ全体を通じて言えることだが、内容がきわ

めてしっかりしていて、大人が利用しても十分役に立つ。今までに、魚、水草、水生昆虫、水鳥の4冊が刊行されているが、3冊目に出た「水生昆虫」など、一般に利用できる図鑑では今でもこれにまさるものはないと私は思っているほどだ。それが数百円で手に入るのだから嬉しい。

シリーズ完結を機に5冊セットでの購入もできるので、水辺の生き物に関心のある方にはぜひお薦めしたい。なお、このシリーズは一般書店では求めることができない。〒607 京都市山科区東野中井ノ町11-39 新学社 TEL 075-581-6111（代表）に問い合わせして下さい。

（角野康郎）